

九州大學朝鮮學研究會『年報 朝鮮學』第十九號
二〇一六年 一二月 刊行

書評 馬場久幸著『日韓交流と高麗版大藏經』

押川 信久

『日韓交流と高麗版大藏經』

押川 信 久

高麗高宗三十八年(一二五二)に完成した再雕大藏經(以下、高麗大藏經)は、歴代の大藏經のなかで最も優れたテキストと評価され、現在に至るまで仏教学をはじめ、歴史学・書誌学・文化財学・情報学等の諸分野の研究に大きな影響を与えている。日本では、室町時代に入り、足利氏や各地の有力者の求請により、約五〇部の高麗大藏經が朝鮮王朝から回賜された。江戸時代には、幕府が仏教各宗派に教学振興を奨励し、各宗派で教学の基礎研究が進められるなかで、高麗大藏經を底本とした特定の經典の出版が盛んになった。近代に至っても、『大日本校訂縮刻大藏經』や『大正新脩大藏經』が、増上寺所藏の高麗大藏經を底本として、宋・元・明版の大藏經と対校して出版されている。

高麗大藏經を主題とした近代的な研究は、一九〇〇年代初頭に日本人研究者によって開始された。しかし、一九五〇年

代以降は、研究の主軸が経板を所蔵する韓国へ移っており、韓国での研究動向を適切に把握した上で成果を発表することが不可欠になっている。馬場久幸氏(以下、著者)の『日韓交流と高麗版大藏經』(以下、本書)は、以上の状況を踏まえ、高麗大藏經に関する日本・韓国の研究成果を網羅的に整理した上で、日本における高麗大藏經の受容・活用状況を考察している。

本書は、著者が二〇〇七年一月に韓国円光大学校に提出した博士学位論文を基にして、加筆・修正を行ったものである。所収の論文は、序章を除き、著者が二〇〇三年以降、日本・韓国の学術雑誌や書籍で公表したものであるが、本書に収録するにあたり、改題や補訂が適宜施されている。

本書の構成は下記の通りである(初出一覧・あとがき・索引・辛子は省略。括弧内は初出年次)。

序 章 研究の目的と研究成果の整理

第一節 研究の目的と意義

第二節 日韓における高麗版大藏經の研究成果とその動向

第一章 日本所藏の高麗版大藏經

第一節 寺院・神社所藏の高麗版大藏經(二〇〇三年)

第二節 大谷大学所藏高麗版大藏經の伝来と特徴(二〇〇八年)

〇八年)

第三節 日本所蔵の高麗版大藏經——諸本から見た印刷年代の検討——(二〇一二年)

第二章 室町時代の高麗版大藏經の受容と活用

第一節 足利氏の高麗版大藏經受容(二〇一三年)

第二節 北野社一切經の底本とその伝来(二〇一三年)

第三節 琉球国への高麗版大藏經の伝来と活用(二〇一四年)

第三章 江戸時代の高麗版大藏經の活用

第一節 近世の大藏經刊行と宗存(二〇一五年)

第二節 江戸時代における高麗版大藏經の活用——學術的利用を中心に——(二〇一二年)

第四章 高麗版大藏經の影印本と版本

第一節 高麗版大藏經影印本の問題点(二〇〇四年)

第二節 高麗版大藏經の影印本——東洋仏典研究会本を中心として——(二〇一〇年)

附録Ⅰ 高麗版大藏經関係研究文献目録(二〇一〇年)

附録Ⅱ 高麗版大藏經(東国大学校本・東洋仏典研究会本)大正新脩大藏經 五十音順対照目録(二〇一二年)

二
本節では、評者が理解した範囲において、各章の内容を概観することにした。

研究所によって推進され、研究環境の整備がはかられたとした。

第一章では、日本各地の寺院・神社に現在所蔵されている高麗大藏經について、その現状と伝来の経緯および印刷年代を検討した。第一節では、一三蔵の高麗大藏經の現状とその伝来の経緯を、先行研究の成果に依拠して整理した。

第二節では、大谷大学図書館所蔵の高麗大藏經について、諸巻末に付属する跋文の内容を分析する作業を通じて、その印刷年代と伝来の経緯等を考察した。そこで、大谷大学所蔵の高麗大藏經が跋文の記載通り一三八一年に印刷されたものであることや、少なくとも一四九六年には日本に伝来しており、これに大内氏が関与していたことを指摘した。

第三節では、大谷大学・増上寺・相国寺・法然寺・妙心寺・泉涌寺に所蔵されている高麗大藏經の特徴を概観した上で、これらの同一經典の記述を比較し、各々の印刷年代を検証した。六点の高麗大藏經のうち、印刷年代が明らかな大谷大学本と増上寺本を比較し、さらに増上寺本と妙心寺本、相国寺本、法然寺本を比較した結果、大谷大学本↓妙心寺本↓相国寺本↑増上寺本↓(法然寺本)↓泉涌寺本の順に印刷されたとした。

第二章では、室町時代に足利氏をはじめとする日本の諸勢力が、どのような理由で朝鮮に高麗大藏經を求請し、回賜された經典をどのように利用したのかについて考察を加えた。

序章では、まず高麗大藏經に関する研究について、韓国人研究者が日本の研究成果を踏襲した上で研究を行っている一方で、日本人研究者はごく少数を除いて韓国研究成果を重要視していないとした。そこで、現在では日本の研究成果のみに依拠することには限界があると指摘し、韓国の研究成果も踏まえた上で、高麗大藏經が日本でどのように受容・活用されたのかについて考察すると述べた。

続いて高麗大藏經に関する研究成果と動向を、日本と韓国に各々分けて整理した。前述のごとく、高麗大藏經に関する近代的な研究は、一九〇〇年代初頭に日本人研究者によって開始された。以後、日本では、高麗大藏經雕造の年代と回数、高麗大藏經の日本伝来の経緯、日本各地に伝存する高麗大藏經に対する調査報告を中心に研究成果が蓄積されてきたとした。一方、韓国では、一九五〇年代より出版文化史や日韓交渉史の側面から高麗大藏經が研究されはじめ、一九七〇～八〇年代には影印本の出版等によって書誌学・歴史学・出版文化史の各分野で成果が生みだされた。一九九〇年代に入ると、経板に刻まれた刻工者名をはじめ、これまで注目されることが少なかった資料の分析を通じて、雕造事業の主体や、大蔵都監と分司大蔵都監の所在地に関する研究が進められた。二〇〇〇年代以降は、研究の深化と多様化が進行し、高麗大藏經を主題とした国際学術会議の開催が相次ぐ一方で、經典のテキストファイル化とデジタル撮影が高麗大藏經

第一節では、足利氏による大藏經の利用の状況を検証した。足利氏は、將軍家として、將軍の誕生日祈禱を相国寺・南禅寺・建仁寺等の禪宗の有力寺院で挙行し、將軍の誕生日の祝賀に加え、国家安寧の祈願もあわせて行っていた。誕生日祈禱では、大藏經を転經し、『大般若波羅蜜多經』などを看經しており、足利氏は、この祈禱に利用するための大藏經を朝鮮に求請し、回賜された經典を寺院に奉安していたとした。

また、足利氏は、一四一二年に北野社で行われた一切經の書写に際し、その前年に朝鮮より回賜された大藏經を貸与していた。第二節では、このとき書写された北野社一切經の『大般若波羅蜜多經』の記述を再検討し、その底本が高麗大藏經であることを確認した。また、『大般若波羅蜜多經』以外の經典については、園城寺等で所蔵される大藏經の事例を検討した結果、高麗大藏經だけではなく、中国版の大藏經も底本として混合していたことが指摘された。

第三節では、琉球国による朝鮮への大藏經求請の様相を、琉球仏教の隆盛に貢献した芥穩承琥と京都の仏教界との関係に焦点を当てて考察した。京都南禅寺出身の芥穩は、景泰年間(一四五〇～一四五六)に法求人として琉球へ渡り、尚泰久王の庇護のもとで広厳寺・天龍寺・天界寺・相国寺・円覚寺等の寺院の開山住持となった。芥穩は京都の禅宗寺院をモデルとして琉球国に仏教を興し、さらに国家安寧のために大藏經の転読を行うことを企図した。しかし、琉球国には寺院

の法宝となるべき大藏經が所蔵されていなかったため、朝鮮に大藏經を求請したとした。

第三章では、江戸時代に高麗大藏經を底本とした經典が出版され、学術的な利用がはかられるに至った様相を明らかにした。第一節では、日本における大藏經刊行の先駆けとなった宗存版の刊行について検討した。宗存は、伊勢神宮内宮の宮寺である高日山常明寺の住持であり、伊勢神宮の内宮に奉納するため、大藏經の開版を發願した。事業自体は、一六一三年から一六二六年までの一三年に及んだが、全藏が刊行されるには至らなかった。現存する宗存版のうち四点の經典を高麗大藏經と比較したところ、宗存版が高麗大藏經の覆刻ではなく、一部で校正が行われていたとした。また、宗存版の底本について検討し、刊記や柱題の形式や卷末の校正録から判断して、底本が高麗大藏經と断定でき、従来の指摘通り建仁寺所蔵のそれが使用された可能性が高いとした。

第二節では、室町時代と江戸時代における高麗大藏經の学術的な利用について考察した。室町時代で全盛を誇っていた禅宗は、実践修行に重点を置く一方で、学術的な知識を必要としていなかった。そのため、室町時代は大藏經が学術的に利用された可能性は極めて低いとした。他方、江戸時代には、仏教が幕藩体制の枠組みに組み込まれていく中で、仏教界において各宗の教学が振興され、戒律が復興され、基礎研究の推進がはかられていた。例えば浄土宗では、関東十八檀林と

呼ばれる僧侶養成機関が設置され、その筆頭となった増上寺に高麗版をはじめ三点の大藏經が所蔵されていた。増上寺では、大藏經が僧侶に貸し出され、体系的な教学の教育や研究がなされていた。そこで、僧侶は、經典を見直すことで高麗大藏經の善本としての価値を理解し、これを底本とした浄土教典籍を出版したとした。

第四章では、高麗大藏經の影印本として現在出版されている東国大学校本と東洋仏典研究会本を考察の対象とした。第一節では、東国大学校本と東洋仏典研究会本の双方に見える欠字の問題をとりあげた。海印寺に所蔵される高麗大藏經の版本の調査は、二〇世紀に入って三度実施された。このうち一九一五年の小田幹治郎の調査報告によれば、海印寺の版本には一八枚二六面の欠版と一三六箇所一〇一七文字の欠字があったという。そこで、欠字箇所を双方の影印本と比較した結果、以下の三点が確認できたとした。①東国大学校本では七八箇所五一三文字の欠字があったが、東洋仏典研究会本には見られなかった。②東国大学校本と小田の報告とで欠字数の異なる箇所が一七箇所あった。③東国大学校本には、小田の報告以外にも一二〇箇所六五四字の欠字が確認できた。また、欠字部分に対して、東国大学校本は手写と金属活字によって修正されていたが、修正されていない箇所もあった。一方、東洋仏典研究会本は、すべて手写で修正されているとした。

第二節では、高麗大藏經の影印本の出版背景や底本、欠字の補完について検証した。東国大学校本は、全四八冊で構成され、一九五七年から一九七六年にかけて東国大学より刊行された。第一冊から第二〇冊までの底本は不明であるが、第二一冊以降は東国大学校所蔵の高麗大藏經を底本としたと考えられる。一方、東洋仏典研究会本は、一九七一年から一九七五年までの期間、全四五冊がアジア文化事業株式会社から刊行された。東洋仏典研究会本の底本については、東国大学校本やソウル大学校奎章閣所蔵の高麗大藏經と比較したところ、ソウル大学校奎章閣所蔵のものが妥当と結論づけた。

また、欠字については、月精寺・正陽寺・増上寺・大谷大学(旧東本願寺)所蔵の高麗大藏經で補修が行われていたが、補えない箇所は、増上寺所蔵の宋版・元版・明版の大藏經を参考にしたか、『大日本校訂縮刻大藏經』を参考にしたと考えられるとした。

三

本節では、本書の有する学術的な意義について、コメントを付すことにしたい。

まず、本書では、一九〇〇年代初頭より開始された高麗大藏經に関する日本・韓国の研究成果が網羅的に収集されている。特に、これまでの研究成果の整理では、韓国側の研究が数字の上でも多いばかりか、新たな成果が出ているにもかかわらず

わらず、放置され続けているとして、韓国の研究成果の整理に重点が置かれていることが注目される。なお、個別の研究成果については、本書末尾の附録Ⅰに、一九〇三年から二〇一四年までに発表された論文・著書・資料および書評が三二八件採録されている。

次に、本書では、日本国内に現存する高麗大藏經の所在や保存状態等を網羅的に調査し、諸本を比較検討することで、各々の特徴を明らかにしている。これらの作業は、高麗大藏經を研究の対象とするにあたり、基礎的な情報を提供してくれるものであり、必要不可欠といえよう。

さらに、高麗大藏經のテキストとして現在利用されている二種の影印本に対して検討が加えられている点も、本書の特徴として挙げられる。これらの影印本に関する情報は、今後どの分野から接近するのであれ、高麗大藏經に関する研究を遂行する上で必ず共有しなければならないものである。また、本書末尾の附録Ⅱには、二種の影印本に加え、『大正新脩大藏經』も対照した上で、經典名を五十音順で収録した目録が掲載されており、今後の研究に有益である。以上より、本書は、高麗大藏經を研究の対象とするにあたり、これまでの歩みをふりかえり、これから研究を遂行するための前提を示す、いわば道標としての役割を担う成果と位置づけられるであろう。

を感じた点もなくはない。第一に、前述のごとく、本書では、高麗大蔵經に関する日本・韓国の研究成果が網羅的に整理されている。ところが、現時点での高麗大蔵經研究の到達点と課題は、研究動向の全体的な総括が行われていないために、管見のかぎり一切示されていないように思われる。また、本書全体の主題として、日本における高麗大蔵經の受容と活用を設定したことにしても、主題を設定した根拠が明確にされていない。さらに、研究の到達点と課題が曖昧なままにされているために、本書全体における各章の位置づけについても、著者の意図を充分にくみとれない面があることは否定できない。

第二に、本書では、各節で論点と見解が示されているが、全体としての結論に相当する章が設けられていない。この点は、本書の各節が既発表の論文をもとに構成されていることと何らかの関係があるのかもしれない。しかし、本書を単なる既発表の論文の集成ではなく、著者のひとつの研究成果とするのであれば、少なくとも本書で論述した要点については、結論としてまとめることが求められるであろう。

第三に、第二章第三節で琉球国への高麗大蔵經の伝来と活用をとりあげたことに關して、近年の研究では、一五世紀後半の朝鮮への「琉球国王使」に偽使が相当数含まれていたことが指摘されている。本書で朝鮮から琉球国に大蔵經が回賜されたとみなされた事例のうち、一四五五年に朝鮮を訪れた

道安の使節は、確実に博多商人が仕立てた偽琉球国王使の初見とされる。一四七一年の自端西堂の使節もまた、副使として博多商人の平左衛門尉信重が同行しており、同じく博多商人が仕立てた偽使であった。さらに、一四九一年に朝鮮を訪れた耶次郎（也次郎）は、その二年後にあらためて訪れると、朝鮮側から偽使と認定された人物である。以上の事例において、琉球国が自ら使節の派遣に關与していたとは考えがたく、朝鮮から琉球国へ高麗大蔵經が伝来したとみなすのは困難である。したがって、朝鮮から琉球国への高麗大蔵經の伝来が史料上より確認できるのは、一四六一年に朝鮮を訪れた普須古・蔡璟の使節の事例のみといえよう。

四

以上、本書の紹介と内容に対するコメントを試みた。前述のごとく、高麗大蔵經は、歴代の大蔵經のなかで最も優秀なテキストとされ、仏教学はもちろん、歴史学・書誌学・文化財学・情報学等の諸分野で研究が進められてきた。研究の主題や方法、主張は多岐にわたっており、これらを網羅的に整理した上で自らの見解を提示していくことは容易ではない。

本書は、こうした困難に真つ向から立ち向かった労作である。日本・韓国の研究成果を網羅的に収集した上で、研究の流れを簡潔に整理し、日本に伝来した高麗大蔵經の現状や利用状況を的確に考察している。さらに、現在出版されている

つは刊記が印刷されていることからそれ以前に印刷されたと推測できるとする（本書、一三五頁）。

(2) 泉涌寺本は、明治天皇の冥福を祈るために、一九一五年に朝鮮総督府が中心となって印刷されたものである。一九一五年の大蔵經印出事業については、小田幹次郎「大蔵經奉獻願末」（同著『小田幹次郎遺稿』（小田梢、神戸、一九三一年）所収、一九二三年初出、五六―七九頁を参照）。

高麗大蔵經の影印本の特徴を明らかにしており、今後高麗大蔵經に関する研究を進める際には必ず目を通すべき成果である。ただ、研究の現状および今後の研究に対する展望については、著者自らの見解を明確に示してほしかった。また、隣接分野ですでに議論された事項を踏まえないまま、論述が進められた箇所が見られたのが惜しまれる。

このような問題が生じるひとつの要因として、研究分野の細分化が進む一方、研究者の間で異分野の研究に対する関心が低下してしまう状況が存在することは否めない。なかでも、高麗大蔵經に限らず、朝鮮仏教に関する研究においては、こうした傾向が強く見受けられるといわざるをえない。以上の現状を打開するには、今更の感はあるが、個々の研究者が、自らの研究分野だけではなく、関連する他分野の研究にも目を配り、課題の共有をはかることがあらためて求められる。

（法蔵館、二〇一六年二月刊、A5判、四二六頁、八五〇〇円＋税）

註

(1) 法然寺本の印刷年代について、著者は、少なくとも二種類の高麗大蔵經が混合しているために特定が困難であるが、ひとつは『経律異相』卷四六の第九張・一〇張と第一五張・第一六張が印刷されていることから増上寺本と同時期かそれ以降の印刷、もうひとつ

書評 馬場久幸著『日韓交流と高麗版大蔵經』（押川）

(4) これを指摘した代表的な研究として、村井章介「倭人海商」の

国際的位置―朝鮮に大蔵經を求請した偽使を例として―（同著『アジアのなかの中世日本』（校倉書房、東京、一九八八年）所収、一九八七年初出）、橋本雄「朝鮮への「琉球国王使」と書契―割印制」（同著『中世日本の国際関係―東アジア通交圏と偽使問題―』（前掲）所収、一九九七年初出）が挙げられる。

(5) 伊藤幸司「日朝関係における偽使の時代」(前掲)、一二四頁を参照。

(6) 信重については、村井章介「建武・室町政権と東アジア」(同著『アジアのなかの中世日本』(前掲)所収、一九八五年初出)、九四〜九五頁を参照。

(7) 『成宗実録』卷二七九、二四年六月辛未条。耶次郎(也次郎)と朝鮮の交渉については、村井章介「『倭人海商』の国際的位置―朝鮮に大蔵経を求請した偽使を例として―」(前掲)、三五〇〜三五二頁、橋本雄「朝鮮への『琉球国王使』と書契―割印制」(前掲)、八九〜九二頁を参照。